九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

マルティン・ルターによる新約聖書の翻訳 : ギリシア語νέκρωσιςの訳出をめぐって

広松, 淳
九州大学大学院人文科学府言語・文学専攻 : 修士課程

https://doi.org/10.15017/1517807

出版情報：九州ドイツ文学. 28, pp.1-30, 2014-10-07. 九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：

マルティン・ルターによる新約聖書の翻訳

── ギリシア語 νέκρωσις の訳出をめぐって ──

広　松　　淳

はじめに

「イエスの死」とは、人間の罪を背負っていたとする贖罪、またその贖罪によりすべての人間は救われたとする救済、そして、十字架後の復活など、地上でのイエスと復活後のイエスの転換点を理解する重要な出来事だった。[1] 牧師、神学者だったマルティン・ルターは、同時に翻訳者でもあった。説教をする立場であったルターが、説教の拠り所となる聖書の翻訳をした時、そこには様々な葛藤が存在したと思われる。説教を行う者にとって、「イエスの死」をどのように釈義するのかが、説教だけではない、教会が歩むべき信仰の方向性を決める重要な要素であるため[2]、ルターは、その解釈に頭を悩ませてきたに違いない。以上の事から、ルターを含め数多くの翻訳者たちの葛藤が最も強く現れる「イエスの死」という言葉を検証する事で、ルターの翻訳にはギリシア語原典からの直訳ではない、解釈を異にする言葉が使用されている事、また、この事が、後の聖書翻訳に多様性を与えた事を示す。

使徒パウロが記したコリント人への第二の手紙（以下第二コリント書）四章十節において、ギリシア語原典で τὴν νέκρωσιν τοῦ Ἰησοῦ[3]（イエスの死を）と書かれている箇所は、ギリシア語原典の νέκρωσιν[4] やウルガタ聖書 mortificationem に則して日本語に翻訳した場合「殺害、死亡」や「苦行、制欲、死亡」という言葉に翻訳される事が考えられるため、ただ単純に「死」とするには問題がある。しかし、ルターはこの箇所を das sterben des hern Jhesu（主イエスの死）[5] と翻訳しており、イエスの殺害や苦行といった意味が薄れている。イエスが十字架上で無残に殺害された事は明らかではあるが、それまでの説教の伝統は一旦置いて、ルターの目指す宗教改革とは聖書の記述に重点を置き（聖書第一主義）、熟読する中で真のキリスト者にふさわしい思想が生まれてくる事を最も大きな目的とした。そのためには、イエスの生涯、とりわけその死をめぐり、最も生々しい光景を想起させる νέκρωσις の訳出に工夫が必要ではなかったか。なぜなら、イエスは進んで十字架に掛けられたとするのと、十字架上で処刑、殺害されたのとでは釈義が大きく変わってくるからである。それではなぜ、いくつか考えられる中からこの表現にしたのだろうか。[6] 第二コリント書におけるルターの翻訳には、信徒が日々の信仰生活の中で背負わなければならなく、また、背負う事で、信徒一人ひとりに新たな命が現れるために必要な「イエスの死」[7] の苦しみの表現が乏しい。ルターが νέκρωσις に Sterben をあてた理由として、νέκρωσις には「殺害、制欲」の意味が含まれるため、進んで十字架に掛かったとされる、いわゆる、ただ神とイエ

スの一対一の関係において忠実で受動的であったイエスの最後には不適切だと考え[8]、それまでのカトリック教会の教えを守ってきた信徒たちの間に、余計な混乱が起きる事を避けるために Ermordung（殺害）や Askese（禁欲、苦行）ではない死に赴く様子全般を表現できる Sterben を選んだと考えられる。また、ルターと同様の翻訳は、その後のドイツ語訳聖書にも多く見られ、この傾向は英語訳聖書にも見られるが、ドイツ語訳聖書とは異なり θάνατος に近い death（死）が多い。νέκρωσις の持つ意味が翻訳を困難にし、この事が翻訳に多様性を与える原因となり、結果として「イエスの死」をめぐる釈義をより複雑なものとした。

本論文では、ルターの著書に度々言及されている、死を恐れるあまり、過剰に救いを求め過ぎる信徒の行いに警戒する事が、死全般の説教、並び νέκρωσις や mortificatio の翻訳にいかに大きな影響を与えたかを検証する。そして、ルター訳聖書における νέκρωσις や mortificatio、そして四福音書に共通するイエスが絶命する箇所の翻訳には特徴があり、この特徴とルター以降のドイツ語訳聖書、英語訳聖書と比較する事で、ルター訳聖書が、以後の聖書翻訳の多様性の源泉であった事を解明する。また、この多様性は矛盾と隣り合っており、「イエスの死」というキリスト教神学上最も重要な箇所に、原典とは異なるルター訳聖書の特徴が現れているため、ルター訳聖書が、翻訳のお手本として、その後の各会派の信条や時代背景に応じた釈義に必要な翻訳を行う自由を与えた事を解明する。

1．νέκρωσις とは何か

（1）新約聖書における νέκρωσις の使用背景

新約聖書において名詞 νέκρωσις は二カ所使用されている（第二コリント書とローマの信徒への手紙第四章十九節、以下「ローマ書」）。[9] νέκρωσις は νεκρός（死んでいる、死んだ、生命のない）をその語源としている。νεκρός の使用頻度は高く、新約聖書全体で繰り返し使用されている。[10] しかし、使用頻度が高いとはいえ、その使用のほとんどは限られた形である。νεκρός は名詞として用いられて、「死者、死人」となっている事が多く（ドイツ語では der Tote）[11]、その中でも圧倒的に多い形が（ἐκ）（τῶν）νεκρῶν（von den Toten）であり、イエスが死者の中から復活する様子と神は死者の中より甦らせる力を持っている、という箇所で使用されている。[12]「～は死んでいる」という述語的に νεκρός を使用している箇所は、パウロ書簡[13] ではローマ書でわずかに見られ（7：8、8：11）、四福音書には見られず、ヨハネの黙示録で三カ所（1：18、2：8、3：1）、他わずかな使用例が存在するだけである。新約聖書において、νεκρός は肉体的にはほぼ確実に死んだ状態、死んだ物質、奇妙な言い方かもしれないが、肉としての塊が必要な箇所に多く見られるようだ。

そもそも、信仰がしっかりと守られており、資金や信徒の生命の安全など保証されている時に、パウロが各教会に手紙を書いているわけではない。むしろ、各教会の抱える様々な問題を如何にしたら解決出来るのかと奔走している時に書いているのだ。教会内部での対立への苦言（第一コリント書1：10以下）、パウロ自身の受けた責め苦について（テサロ

ニケの第一の手紙2：1以下、第二コリント書1：8以下)、献金について（第二コリント書8：11以下、9：6以下）など、常に解決すべき課題にパウロは助言を与えている。そして、もっともパウロが力を注いでいた問題は信仰全般にかかわるものであった。なぜならば、イエス処刑後に広がりをみせた初期キリスト教会はユダヤ教の影響を引きずった部分も多く見られ、その事への警告がパウロの手紙には多く存在する（第一コリント書9：19以下、第二コリント書3：1以下、ガラテヤ人への手紙2：15以下など)。また、使徒行伝には、パウロによるユダヤ人への決別宣言とも言える言葉も見られる（使徒行伝28：26-28)。如何にして、パウロが初期キリスト教会から、ユダヤ教の影響を少なくしようとしたのかがうかがえる。こういったパウロの役割について、山田耕太は次のように述べる。

> パウロが取り組んでいたのは、社会学的に見てユダヤ人を異邦人と区別する指標、すなわち、安息日〔中略〕、割礼、食物規定の遵守という枠組みの中で、割礼と食物規定の順守という立場を壊し、民族主義的色彩を払拭して普遍的なキリスト教を創出しようとする神学的な試みだったのである。〔中略〕パウロは第一世代のキリスト教徒ではあったが、民族主義的色彩を残していた原始キリスト教から普遍主義的な初期カトリシズムへと橋渡しする中間的な存在だったのである。[14]〔傍点筆者〕

この「橋渡しする」役割に没頭すればするほど、パウロは、自身の置かれた立場に気づく。パウロは、ユダヤ人でありながら、その教義に反する行いをしたとして方々で裁かれ、また、宣教する中で、初期キリスト教徒を迫害した過去が自身に付きまとっている事を常に意識していた（使徒行伝9：1以下、ガラテヤ人への手紙1：13以下参照)。つまり、「原始キリスト教から初期カトリシズム」への橋渡しをする存在でありながら、パウロ自身もその転換の流れに乗り、信徒から信頼を得る必要があった。

パウロは、教会に訪れる不穏な存在を警戒していたため、信徒たちからの信頼を可能な限り早く得る必要があった（第二コリント書11：4以下)。パウロが警戒する者たちとは、それまでパウロの伝道で広まったイエスの言葉や奇跡行為とは異なる事を巡回しながら教え、さらに、自身を使徒たちと同じ存在だと触れ回る人物であった。[15] この存在を知ったパウロは厳しい論調で巡回者たちを非難する。「偽使徒たち」という言葉を用い、サタンを引き合いに出して、これらの者たちに気をつけるよう説得している（第二コリント書11：13-15)。教会にとって危機的状態であり、パウロ自身の使徒としての役目を脅かす存在の登場、この時期に書かれた第二コリント書に νέκρωσις が使用された事は偶然とはいえないパウロの強い意思が感じられる。θάνατος とは区別され、νεκρός を語源とする生々しい死の光景を想起させる νέκρωσις の使用で、パウロは、甘い言葉で教会の中に入ってくる巡回者と一線を画した。

（2）νεκρός と θάνατος の違い

νεκρός と比較すると、明らかに θάνατος は死そのものの概念、または死の姿（死神など）

を表す事が多い。[16] 古典ギリシア語期、ホメロス、トゥキュディデスの作品においてθάνατος は死刑宣告、または他の者から受ける死の恐怖を表現する。[17] 新約聖書ギリシア語においても、死の概念であり、死に至らしめる原因でもある。ヨハネの黙示録六章八節に登場する「死」も、馬に乗る者のような形をしており、また、この世に死をもたらす原因と鑑みて、人が死を恐れるあまり、その死が形をもって目の前に現れた「死神」と考えられる。だから θάνατος には、死んでしまった後の状態がほとんど描写される事はなく、その後の状態は νεκρός で表現されている。[18] よって、νεκρός には、θάνατος を受けて死に至った者の亡骸を意味する事が多い。この事から、新約聖書において θάνατος から甦る事はほとんどなく、νεκρός から死者は甦る。この θάνατος と νεκρός の関係をわかりやすく表現している箇所が第一コリント書十五章二十一節にある。アダムの原罪[19] によって人には死（θάνατος）が生じ、キリストと共にある者は死者たち（νεκρός）から甦る。[20] ここにはっきりと二つの概念の違いが見てとれる。θάνατος によって死に渡された者が、νεκρός の状態になり、そこからキリストによって甦る。この二つを同じように扱う事は困難である。

しかし実際に、νεκρός と θάνατος の違いは文脈に左右される。上述の第一コリント書のように、同じ節でこの二つの単語が対比されている時は理解しやすい。しかし、ヘブル人への手紙五章七節 σώζειν αὐτον ἐκ θανάτου（ihn vom Tod erretten）やヤコブの手紙五章二十節 σώσει ψυχὴν αὐτου ἐκ θανάτου（der wird seine Seele vom Tode erretten）のように、単独で θάνατος が使用され、「救い」という言葉と結びつくと解釈は様々だ。肉体も死んだ状態から、と考える事も可能であり、また、肉体の死は問題ではなく、心や魂の死からの救い[21]、と考える事も出来る。事実、ヘブル人への手紙のこの箇所では、生きている時に、自分を死から復活させてくれる者に対して嘆願を行っている聖句であり、死んだ体からの救いというよりは、死に渡される運命からの救いと釈義出来る。また、ヤコブの手紙は、はっきりと「魂を死から救い」と書かれている。新約聖書において「～からの救い」「～からの甦り」となる場合、その大半が νεκρός を使用しているため、用法の少ない θάνατος と甦りや救いが結びつくと釈義は困難になる。

同じような表現がローマ書七章二十四節 ἐκ τοῦ σώματος τοῦ θανάτου τούτου（von diesem todverfallenen Leibe）にある。ここでは、神の律法に隷属しながらも、一方で、罪の法則にも隷属している、みじめな自分を救ってくれるのは一体誰なのか、と問うている箇所である。ここも、実際に死んでしまい νεκρός の状態になった体というよりは、神の律法に完全に隷属できない自分の魂を死んだ物と考え、「魂において死に陥った体から」と考えられる。少なくとも、この者は、仮に魂において死んでしまったとしても、この自問している瞬間肉体において死んではいない。

以上のように、θάνατος は単独で使用され νεκρός との違いが理解されにくい箇所も存在するが、肉体において完全に死に、死体となり νεκρός の状態になっている物とは明らかに異なる。この二つの言葉が同じ聖句の中に出てくる時、福音史家やパウロは、明らかにこの二つの違いを表した。この事から、翻訳者や説教を行う者は、この二つの単語の持つ意味の違いをはっきりと示す必要がある。

（3）νέκρωσις の翻訳に際して

ルターは聖書翻訳だけではなく、牧師として説教を日々考える立場であったため、信徒を導くはずの自身の言葉が、かえって信徒を神に対して不従順な行為へと向かわせてしまう事だけは避けたかった。νέκρωσις の翻訳もさる事ながら、死についての説教や死を目前とした人への説教を行う際、常にルターの中には、死をどのように伝えるべきか、という葛藤があった。「イエスの死」によって克服された人間の罪や死は恐れるに足らない、と言うべきか。しかし、そのように説教により、信徒は死そのものを軽視し、場合によっては「イエスの死」自体を軽視する事につながるのでは、とも考えたのではなかろうか。人間と死の間にある非常に危うい関係を、ルターは『死への準備についての説教』の中で、こう述べている。

> 死の姿は大きく恐ろしい物となる。なぜなら、小心で物怖じした人の性質が死の姿をあまりに深く自身の記憶に刻み込み、その姿を目の当たりにしたから。そうした事に加えて、今や悪魔が、人間が死の恐ろしい様相や姿に心を奪われ、それが原因で心煩わされ、弱腰そして臆病となる事に寄与する。それはつまり、悪魔があらゆる恐ろしい急死、変死の姿を見せ、その死の姿とは、ある者がかつて見て、聞いて、もしくは読んできたものだ。それに加えて、神がかつてここかしこで罪人たちを苦しめ、そして破滅させたような神の怒りも共に組み込む。悪魔が、人間のびくびく臆病な性質を死の恐怖と生への愛着と不安へと追いやるため、それが原因で、人間はそのような意思をあまりに身に負い過ぎ、神を忘れ、死を避け、死を憎む。そして、それゆえ最後には、神に対して不従順な者だと判明され、そうあり続けると言われている。なぜなら、この死の姿があまりに深く考察され、見つめられ、認識されればされるほど、ますます、死にゆくことは深刻で憂慮すべきものとなる。(WA 2, 686-687)[22]

1519年に書かれたこの説教で、ルターは人間の死に対する恐怖心の大きさを示し、その恐怖心に悪魔がつけ込み人間は神を裏切る事になる、と説教している。ルターは自身の嵐による恐怖体験[23]から人間の弱さを認識しており、死について説教・執筆活動する時には細心の注意を注ぎ、特に、人が自分自身の死に直面し、また他人の恐ろしい死の姿を目にした時の恐怖を如何にしたら軽減出来るのかを日々考えていたのである。[24] この説教の中で、ルターは死について語る不安がありながらも、死は恐怖する事ではなく、もうすでにイエス・キリストにより克服されていると書いた。[25] なぜなら、当時の人々は死を恐れるあまり、教会に不必要に寄進し、また贖宥状を代表とする物に大金を叩いた。[26] これらの教会からの提案を、ルターは死を間近にした人や、元々死を恐れる人間の性質への「悪魔の働きかけ」と考えただろう。だから、もうすでに死は克服されているので、悪魔の言葉に耳を傾ける必要はなく（むしろそのような事は神の意思に反した罪であり）、日々祈り、悔い改め、イエス・キリストを信じて生きていく事の重要性を説いた。[27]

引用後半の「それゆえ最後には、神に対して不従順な者だと判明」という箇所にルター

の信徒に対する懸念が見られる。この前に「神を忘れ、死を避け、死を憎む」とある。ルターからすると、常にイエス・キリストを信じている者にとって、死（θάνατος）は克服されているので避ける必要もなく、よって憎む必要もない。だが、悪魔の言葉は、小心な性質の人間を死への恐怖へと追い込み、ルターがもっとも恐れる「神に対して不従順な者」へと変えてしまう。「神を忘れ」とはイエス・キリストを信じない事、また、数々の奇跡行為や、言葉、虐げられた人々に寄りそった日常などをないがしろにする事であるが、イエスの十字架上での死を意識しない事でもある。確かにルターは、恐ろしい急死や変死の姿をむやみに人間の前に示し過ぎる事は、死への恐怖をいたずらに膨らませるだけであり、結果として神を忘れる事になると警告している。しかし、イエスの十字架上での死を想わない事を推奨しているわけではない。むしろ、パウロは、第二コリント書四章十～十二節にあるように、イエスの死を積極的に想う行為こそが死を克服し、生命を得る方法だとしている。[28] しかし、この箇所の νέκρωσις は θάνατος とは異なり死の概念だけで捉える事は難しく、前述したとおり、新約聖書全体で「死者」を表現する事が多い νεκρός をその語源とするため、死の概念というよりは、死んだ物質、いわゆる、目に見え、手で触れる事も可能であるような存在を必要としていると考えられる。この事から、パウロはただ概念としての死だけではなく、目を背けたいほど無残な十字架上でのイエスの死の姿を信徒一人ひとりが想い続けながら生きていく事、そして、その信仰生活とは、当時のキリスト教徒を取り巻く厳しい環境から実際に苦痛を伴い[29]、そういった中でもイエスを信じ続ける事を強く要求したと考えられる。[30] しかし、パウロとルターは共にイエスの死を日々想う事を信徒に求めているが、ルターは、あまりに死の姿を恐れすぎ、正しい信仰の方向から逸脱する傾向にある信徒や、イエスは進んで十字架に掛かったと伝えられてきた信徒の心情（それが殺害であったと聞かされた時）を考慮すると、パウロが書簡の中で記したほど、あまりに惨たらしいイエスの死の姿を想い続ける信仰には否定的であった。

2．新約聖書における二つの νέκρωσις

（1）第二コリント書四章十節

青野太潮が「殺害」という記述の必要性を訴えるのと同様に、ジャン・カルヴァンは、「この死という語は、この所（第二コリント書4：10）では、聖書の他の箇所とは違った意味で使われている。〔中略〕この所では、わたしたちに現世の限りあるすがたをつくづく考えさせるような患難を意味しているのである」[31] と述べており、普通の死とは明らかに異なる釈義を行っている。殺害された結果での「死」に間違いはなく、νέκρωσις には、殺害による「死」のみならず「死んだ状態」全般を表す事もある。しかし、この第二コリント書だけでなく、聖書の中には「死」の表現が色々とあるが、νέκρωσις の単語使用は非常に数が少なく、前章で述べたように第二コリント書に一度とローマ書に一度の二カ所のみである。この使用例の少なさに加え、第二コリント書のこの箇所の釈義を困難にする原因は、νέκρωσις と mortificatio では意味が大きく変わってくるからだ。

νέκρωσις を θάνατος とは区別される νεκρός を語源に持つものとして考え、また新約聖書全体で圧倒的に多い表現 ἐκ τῶν νεκρῶν（その死者たちから）を鑑み、そして、それを περιφέρω（運び回る、持ち回る、あちこちへ追いやる）するとしたら、この箇所は比喩として、殺害されて、死んだイエスの亡骸を信徒は自ら背負い、それはつまり、ローマ帝国の反逆者として処刑されたイエスを背負う事で自身も迫害される危険がありながらも強い信仰心を持って生きよ、と言っているように解釈出来る。このように考えると、青野が主張する殺害の記述以上に、表現としては、当時の信徒の置かれた苛酷な状態を表している。[32] しかし、νέκρωσις に「死体」の意味を与え過ぎると、キリストの復活信仰の強い者にとって受け入れがたい事となりかねない。[33] 一方で、mortificatio の釈義をカルヴァンの解釈で考えたとしたら[34]、キリスト教を信仰する事は、日々、苦痛を味わい、また信徒自ら、キリストが十字架上で受けた苦しみを担い続ける生活を意味し、ただ単に、概念として「イエスの死」を背負って日々の生活を行うのとは異なる、実生活に痛みを伴う信仰を必要としている（たとえば過度な断食など）。

ルターは『死への準備についての説教』の中で、こう述べている。

> あなたはキリストの死のみを気にかけなければならない。そうすれば、あなたは生命を見い出すだろう。そして、もしも、あなたが死をどこか他の所で見つけるのならば、死は大きな不安と苦悩でもってあなたを殺すだろう。それゆえに、キリストは言っている。「この世において（それはまた私たち自身の中において）あなた方は不安を持つだろう。しかし、私の内においては平安を持つだろう」（WA 2, 689）

この箇所でルターは「キリストの死」と「どこか他の所（にある死）」とを区別している。mortificatio と νέκρωσις が、この二つの違いを直接表現出来るとは考えられない。しかし、ルターは「キリストの死」と異なるものは、「神の怒りによって殺された人々や、死が打ち負かしてきた人々」（WA 2, 689）の死と定義している。パウロは νέκρωσις という言葉を使用してまでも、他の死とは違う十字架上での悲惨なイエス・キリストの死を日々想い続ける事を信徒に求めた。しかし、ルターは、人間が死に対して抱く恐怖心をいたずらに煽る事は、信徒を神に対して不従順な者へと変えてしまうと考えた。聖書での使用が「死者」である事が多い νεκρός を語源とする νέκρωσις や「禁欲、制欲」といった苦しい修行を想起させる mortificatio を、そのまま Tote、Leichnam、Ermordung、Askese と翻訳していたら、パウロの意図を表現出来たかもしれない。だが、死に直面した人間の弱さを懸念していたルターは、生々しい死の光景を表現する言葉を避けようとして、幅広く死に赴く姿を連想させる Sterben と翻訳したと考えられる。またルターは、キリストや使徒たちの死と、人々が日々の生活の中で見聞きする死を引き離したかった。[35]

第二コリント書において νεκρός から派生した意味の単語が使われている箇所は、「私たちが自分自身ではなく、その死者たち（νεκρούς）を起こされる、その神に信頼をおく者となるためです」（第二コリント書1：9）、「私たちは常に、イエスのその殺害（νέκρωσιν）を

この体の中に負って歩きまわっている」（第二コリント書4：10）、以上二カ所であり、「イエスが殺害され、神がその死から復活させる」という一連の出来事に νεκρός が使用されている。[36] 神は誰でも復活させるのではなく、神に従順な者だけにその恩恵を与えた。[37]「神に信頼をおく者」となったのは、イエスだけではなく、旧約聖書の中にも登場する（アブラハムなど）。しかし、「罪を彼は自身の身に負い、そして凌駕しがたい絶対的な神への服従によって打ち負かした。永劫の罰を受けた者として神から見放され、絶大的なる愛によって地獄を克服」（WA 2, 691）した者はイエスただ一人だった。ルターが信徒に求めた事は、日々悔い改める事であって、死の影に怯え続ける事ではない。「その死者たち」と複数形で書かれているのは、イエス以降も現れるかもしれない神に従順な者に、その復活の機会があるのを意味している。[38] しかし、第二コリント書四章において、τὴν νέκρωσιν が単数・対格形となっているのは、明らかにイエス一人の死、十字架上での「殺害」を意味している。一章九節の「その死者たち」も、その中にイエスが含まれている事は明らかで、むしろ、そのイエスが殺害された事実を大前提とした上での「その死者たち」と考えられる。

（2）不従順な行い

神に従順であるとは、決して聖職者の言う事、また、教会が定めた儀式を無批判に受け入れる事ではない。ルターは、著書『善い行いについて』の中で、「そしてさらに、この間にも、高尚、華麗、煌びやかな行いは依然として増加しつつある。この行いは人間が考え出したものである」（WA 6, 219）[39] と述べており、当時の教会の腐敗と、敬虔な故にその教会が定めた行いを無批判に受け入れる信徒の存在を嘆いていた。神から地上での権威を与えられている教会に従う事は、神に従う事と考えられていた。しかしルターは、神の権威はローマ教皇ではなく、聖書が示している神の言葉が最終の権威を持つものだと考えていた。[40] また、更に由々しき事として、こう述べる。

> 神と一致していない者、また、神に対して疑念を抱いている者は、どうにかして満足のいく結果を得たく、多くの行いによって神を動かそうと行動し、求めたところで、不安は募る。その者は、聖ヤコブ（ディ・コンポステラ）、ローマ、エルサレム、ここかしこを駆け巡り、聖ブリギッテの祈祷や、その他諸々の祈祷を行い、この日かの日に断食し、ここかしこで懺悔をし、あれこれと尋ね回る、しかし、平安を見つけ出せない。（WA 6, 207）

ここに記されている人々の行動が、「信仰の外側で行われている〔中略〕無価値であり、死んだ者同然」（WA 6, 205）の行いとした。ここで問題となる事は、「神を動かそうとする行動」にある。ルターがドイツ語聖書を普及させる目的は、一人でも多くの人が自分の力で何度も聖書を読み、神はもうすでに人々のために動いてくれていると気づかせるためでもあった。神は人間がその意志をもって動かせる存在ではなく、神の働きに気づいた者が、神に従って生きていく。ルターはこの事を人に気づかせてくれる聖書を、一人でも多く、

可能な限り広い地域の人が読めるように、ドイツ語に翻訳した。[41] マタイによる福音書には、次のような記述がある。

> また、人々に観てもらうために、あなたたちの義をその前で行わぬように注意せよ。さもなければ、天におられるあなたがたの父から報いを得られない。もしも、施しを行う時は、偽善者たちのように、あなたの前でラッパを吹くな。それは、人々から褒められようとするために、彼らが会堂や道端で行う事だ。（マタイ6：1-2）[42]

ルターが危惧するよりも遠い昔、すでに福音書の中に、神と一致していない者、また神に疑念を抱いている者の行動が記述されている。ルターは、人間の弱さとは、特に死を目の前にした時、自分が確実に救われる保証を求め、その保証を得るために常軌を逸した行動をとる傾向があると考えた。この弱さゆえに、ルターによれば、「我々は、祈祷、断食、寄進、あれやこれやの行いをして、人々の前では善い行いをしている多くの人々を目にする」（WA 6, 205）という事態に陥り、また、神に喜んでもらいたい、どうにかして神の心を動かしたいとする一心で、神への信仰を、行いの大きさや献金の金額の大きさで計るようになる。ルターは「したがって、私たちは善い行いの識別を、神の戒めから学ぶべきであり、その行いそのものの見かけ、大きさ、また数量から学ぶべきではない」（WA 6, 204）と述べており、教会が定めた儀式や贖宥状を代表とする教会が収入を増やすために行った物品販売（お守りのような物もあった）など[43]、「善い行い」の識別が「人間が考え出したもの」となり「神の戒めから」学ばれていない事に憂慮していただろう。

当時のキリスト教社会において[44]、信徒一人ひとりにイエスが受けた死と並ぶ苦しみを日々背負い、祈りの日々を送ってもらいたいと願うパウロの言葉は、より危険で刺激が強く、ただ目につくだけの行いを増やすだけだと思われる。ルターは「人間の判断、人間の法規、慣習から学ぶべきではない。こうした事が、私たちが見てきたように、これまで行われてきて、また神の戒めを軽んじてきた我々の盲目の故に、今なお行われている」（WA 6, 204）と述べる。聖書は単なる本ではなく、ルターにとっては読むほどに神の働きが自身の内側に起こってくるものである。聖書に書かれているイエスの生涯に神の働きを見る事が出来、イエスの教えはまさに神の戒めとなって、読んだ者の中で働き始める。このような聖書を守るため、ルターは自身の翻訳した聖書の質を保証する対策として、現在でいうところの著作権のようなものを表す商標を使用する事で、ルターによる原典翻訳を証明する試みを行った。ただし、この作業は当時の印刷工場・校正者たちに多大な労苦を強いる事となった。[45] しかし、これらの労苦を強いて徹底的に出版を管理し、幅広くルター聖書が流布したため、初期の段階で、ルターに反対的態度を示していた教会や地域でさえもルター聖書が行き渡り、受け入れられ、そして、結果としてドイツ語圏全体でルター聖書が使用されたため、宗教的に重要な部分の言語的分裂もなく標準ドイツ語の地位を獲得した。[46]

複製を試みる者の出現など、聖書出版には解決すべき問題が山積していたため、ルターが聖書を翻訳するにあたって警戒したのは、これまで字が読めずとも信仰生活を送ってい

た人々が、自分で聖書を読み、自由に釈義を行い、また、νέκρωσις の翻訳次第ではそれまでの釈義が覆され[47]、多様な信仰形態が現れ[48]、救いの保証を求める行いばかりが独り歩きして、聖書から離れていく事だったと考えられる。[49]

(3) ローマ書四章十九節

νέκρωσις という名詞はローマ書四章十九節において、アブラハムの妻サラの体が高齢のため、すでに子を産めない状態を表現するために使われている（第二コリント書の「イエスの死」と同じ τὴν νέκρωσιν 単数・対格）。かなりの高齢（創世記17：17並びに21：5によれば、アブラハムは当時百歳、サラは九十歳）となり、子を持つには不可能ともいえる年齢にもかかわらず、神に対する信仰の深さゆえに、子を宿す事が可能となったのである。[50] どのような状態からでも、新しい命の誕生を可能とする神の力を表現するために νέκρωσις は使われた。ここでルターは、サラの胎を erstorben leybs（死んだ母胎、子宮〔WA. DB 7〕）[51] と翻訳している。

サラの胎とイエスの死という二つの困難な状況があり、このあとにサラはイサクを産み、また、イエスは復活を遂げる。このように、共に神の力が現れる前段階に νέκρωσις が使用されている事は、必ずしも偶然ではない。[52] ローマ書も第二コリント書もパウロによる手紙だ。サラの胎が「子を産む力が死滅（消滅）した」[53] と理解する事は出来るが、いくら νέκρωσις に様々な語義があっても、第二コリント書における記述は直接的なイエスの死ではなく、信徒が背負うべきイエスの死のようなものという言葉なので、Mord（殺害）はあまりに意味が強すぎる。イエスの死とその復活において神の力が働いた事は疑いのない出来事だが、信徒が日々背負っていくイエスの死のようなものは、決してイエスが十字架上で背負っていたその死とは並ぶものではない、とルターは考えたのではなかろうか。ルターは、パウロが信徒に求める信仰の在り方と十字架上で行われたイエスの殺害を、自身の翻訳を通して混同する事を恐れ、あらゆる死の姿を表す事が可能な Sterben と翻訳したと考えられる。誤解が生じないのなら、第二コリント書には περιφέρω（運び回る、持って歩きまわる）とあるので、その他多くの νεκρός と同じように Tote、あるいは直接「死体」を表現する Leichnam などが適している。しかし、復活信仰との関係もあるので、イエスの死体を「常に」πάντοτε 信徒が運び続けるという釈義は抵抗があるだろう。

3．翻訳における多様性

(1)「イエスの死」と贖罪

これまでは、第二コリント書の νέκρωσις が用いられた第二コリント書の「イエスの死」がどれほど翻訳困難であったかを検証した。本章では、νέκρωσις と並んで、各聖書における四福音書の「イエス絶命の瞬間」を比較する事で、ルター訳聖書、その後の各聖書の特徴、発展を検証する。これらの箇所は、ルターだけではなく、多くの翻訳者を悩ませており、明らかにそれまでの訳を単に踏襲した聖書もあれば、または可能な限り独自性を出そ

うと努力した聖書もあった。[54] また、新約聖書全体を通じて「死」に関する記述は、イエスの死、使徒の死、信徒の死など様々である。そして、新約聖書の中で大きな割合を占める四つの福音書は、直接的にも間接的にも「イエスの死」に関する記述が多い。それは、パウロの手紙も同じ事だ。しかし、イエス絶命の瞬間について直接語っている箇所は意外と少なく、その箇所の翻訳に様々な特徴が現れている。イエスを殺そうとする祭司長たちの策略や住民たちの前での裁判（マタイ26：59-66；27：1、マルコ14：64）、イエスの死は罪に対する贖いだとする記述（ヘブル人への手紙9：15-16）、ローマでの裁判の争点になっている「死んでしまったイエス」（使徒行伝25：19）、そしてエマオへの途中でイエスの処刑について語っている（ルカ24：20）記述の中に θάνατος, θανατῶ（<θνήσκω 死にかけている、死のうとしている）が見られるが、これらの箇所は、直接イエスの死の瞬間やその処刑の時ではない。ピラトゥスがイエスの死を兵隊に確認させる箇所（マルコ15：44、ヨハネ19：33）も死の瞬間ではない。

他方 νεκρῶ（<νεκρός）は、死から復活するイエスに関する事（マタイ27：64、28：7、第二コリント書1：9、コロサイ人への手紙1：18、ヨハネの黙示録1：5；2：5）などに見られる。これまで述べてきた、サラの胎やイエスの死を信徒が背負うといった箇所を含めて、信徒、使徒などの死が θάνατος, νεκρός で記述されている。しかし、イエス絶命の瞬間（マルコ15：37、マタイ27：50、ルカ23：46、ヨハネ19：30）は ἐκπνέω（息を吐き出す）、παραδίδωμι τὸ πνεῦμα（霊を引き渡す）といった表現を使用している。この箇所をルター訳聖書1522年版では［...］gab er den seynen geyst auff（霊魂を手放す＝息絶える、身まかる）、そして1546年版では［...］und er verschied（死ぬ、亡くなる、この世を去る）としている。結果としては同じであるが、死の間近に自身で校正した1546年版の全てを verscheiden に変えた理由は一体何だったのか。1979年版のドイツ語訳聖書共同訳（EÜ）では den Geist aushauchen（霊を吐き出す）や seinen Geist aufgeben（霊を手放す）として、1522年版やギリシア語の持つ意味を生かした翻訳をしている。このように、第二コリント書四章の νέκρωσις や上述の四福音書におけるイエス絶命の瞬間の表現は数が少ないながらも、その重要性からそれぞれの翻訳の特徴が顕著である。

ドイツ語聖書のほとんどが νέκρωσις を Sterben と翻訳している。[55] しかし、同じ Sterben を使用していても、その内容は様々である。例えば、福音聖書（GNB）では、Ich erleide fortwährend das Sterben, das Jesus durchlitten hat,［...］と書かれているように、durchleiden（苦しみながら過ごす、〔苦しみなどを〕味わいつくす）を使用する事で、Sterben が普通の死ではなく、ある一定の時間、十字架上で苦しみ続けたイエスの死を表現している。[56] この聖書翻訳は、ドイツ語訳聖書共同訳における Todesleiden と共通している。だが、厳密に釈義すると、das Sterben erleiden（死ぬ）と fortwährend（持続的な、絶え間のない）から、信徒はイエスを証する事で「常に死に続けている」「死に晒され続ける」と解釈出来る。信徒の置かれた危険な状況を鮮明に表現している。ただ、普通に考えると、「死に続ける」とは滑稽な表現である。死んだ結果、死んだ状態になっている、という現在完了形と同じとも思われない。この翻訳は、迫害される者たちの苦しみを、絶え間なく死ぬという現実的には

存在しえない状態で表現したと思われる。その一方で、[...], immer tragen wir das Todesleiden Jesu an unserem Leib, [...]（EÜ）では、das Todesleiden tragen（死への苦しみを持つ）により、「まだ死んではいない者が、死の苦しみを体に負い続ける」と解釈出来る。しかし、この箇所が das Todesleiden Jesu（イエスの死への苦しみ〈傍点筆者〉）である事を忘れてはならない。イエスが復活までの間、煉獄にでも行っていたとでも言うのだろうか。

ドイツ語訳聖書にも「苦痛を通して、イエスの死を体験する」という直接原典にはない表現[57]を入れてイエス絶命の瞬間を訳した聖書もある。しかし、実際には、「苦痛を通して」という原典にない言葉を使用せずとも、直前の聖句に信徒が行く所々で迫害に苦しむ様子が描かれており、この事が「苦痛を通して」と同じ意味であると理解される。また、この信徒が受ける迫害の苦しみが、イエスが最後に受けた民衆からの罵声や暴力、そして十字架での処刑とたとえられるものとして νέκρωσις が使用されており、翻訳の多様性により、この言葉は今日でも様々な形で翻訳・釈義されている。第二コリント書四章十節に関して、多くのドイツ語訳聖書翻訳者たちがルターと同じ Sterben を使用している理由は、イエスの身に起こった十字架刑とは恐ろしく、呪うべき最悪の事態であり、νέκρωσις で表現すべきだと考えたパウロがこの言葉を使用した事に一定の理解を示しながらも、しかし一方では、（第二コリント書4：8-9のように）どんなに信徒の日々が迫害に満ちて、苦しい事であったとしても、それはイエスの十字架刑と並ぶ事ではないと考えたからだ。それほどに、十字架刑は悲惨な処刑法であった。そして、「キリストの十字架」を青野は「キリストの死」と比較して、こう述べる。

> 新約聖書の全体において、「キリストの十字架」と「キリストの死」とは、決して単純に同じ意味をもっているのではない、つまり両者は交換可能ではない、ということである。なぜならば、後者の「死」は贖罪についての議論に直結しているのに対して、前者の「十字架」は、一度たりとも贖罪として解釈されることはないからである。〔中略〕おそらくキリストの十字架は、それを直接的に私たちのための贖罪として解釈するのには、あまりに悲惨なものでありすぎたのであろう。[58]

「キリストの死」という大きな概念を総合して贖罪と捉える事は可能であるが、「十字架の死」それ自体に贖罪の意味を当てはめる事は適当ではないと青野は言っている。そして、筆者が再三述べてきたように、ルターは、十字架の死があまりにも痛々しく、無残であるがゆえ、その苦しみの只中にいる姿のみを信仰の中心とする事に懸念を抱いたと思われる。しかし、パウロは「十字架のキリスト」なしに「復活のキリスト」は存在せず、むしろ「十字架のキリスト」の持つ悲惨さ、弱さが逆説的に捉えられた事で「復活のキリスト」が実現したと考えた（第二コリント書13：4）。[59] パウロは、第二コリント書四章十節以下で述べるように、イエスの最後の瞬間、そこには弱さ、悲惨さ、あらゆる苦しみを見る事が出来るが、その瞬間を常に信徒は自身の身に置く事でイエスの命が明らかになると考え（第二コリント書4：11-12）、その悲惨の極み、十字架での死を表現出来る言葉として

νέκρωσις を選択した。しかし、ルターも青野も「イエスの死＝贖罪」と考えた時、イエスの死を通して明らかになった新しい命が信徒に与えられた瞬間が「十字架上での死」と理解し、信仰の焦点がその瞬間だけに向けられる事に違和感を覚えたのではなかろうか。キリストの死による贖罪とは、十字架の死だけではないという意味である。

「キリストの死」、命ある存在が死ぬ・殺されるという事を決定的にしたものは十字架刑だったかもしれない、しかし、処刑に至るまでの道は、住民の無理解、弟子の裏切り、公衆での冒瀆など数を挙げればきりがないほどの屈辱に満ちたものだった。これらすべてが「キリストの死」へとつながったものであって、その最後の瞬間が十字架刑であった。このように考える事で、「キリストの死（へとつながるあらゆる出来事）＝贖罪」だとすると「十字架上での死」は「キリストの死」全行程における最後の一部である。よって、贖罪を「十字架の死のみ」にあると考える事は、決して長い生涯ではなかったが、神とつながったイエスの地上での行い── それは死ぬまで従順であった── を単なる日常の出来事と捉え、十字架刑の瞬間に、あたかも初めて神の姿が現れた事を知る者と同じである（たとえばイエス絶命の瞬間に立ち会うローマの百人隊長[60] などがその一例である）。しかし、ルター時代や現代の信徒、聖書をテキストとして読んでいる人たちが、ローマの百人隊長と同じ感覚で「十字架のイエス」を捉えてはならない。ルターは、十字架上での死のみに信仰の焦点が当たりかねないと考えて、νέκρωσις に特別な意味を持たせる事をしたくはなかったのではないか。この一点にルターが νέκρωσις を Sterben と訳した意図が認められよう。

（2）直訳へのためらい

ギリシア語原典マルコ・ルカ福音書における「イエス絶命」の ἐξέπνευσεν（ἐκπνέω）の訳語として、ウルガタ聖書では exspiro が使用されている。πνέω／spiro（息をする、息を吐く、生きている）という動作が、「中から外へ」など動作の出発点を示す ἐκ／ex と結びつき、魂を外に吐き出した事で死を表している。「～を吐き出す」という目的格の部分が動詞の中に含まれているために、「息を」「魂を」吐き出した結果での死ではあるが、自動詞的に扱われており、ドイツ語訳聖書では verscheiden（MB、LB など五種類）／sterben（GN、NGÜ など三種類）で翻訳されている。しかし、上述したようにドイツ語訳聖書共同訳（EÜ）においては、それまでギリシア語・ラテン語の単語に隠れていた目的格（den Geist）がはっきりと現れている。ここでは共同訳聖書が特徴的に見える（1522年のルター訳聖書も同じ）。興味深い事に、マタイにおいて、マルコ・ルカで verscheiden を使用していた五種類の内の三種類が den Geist aufgeben（息・霊魂を放棄する EB、SB）、seinen Geist aufgeben（MB）のように原典の意味に忠実に翻訳している中で、LB と ZB は頑なに verscheiden を使用している。同じ事が sterben を使用している GNB、NGÜ、NL にも見られる（マルコ・マタイ・ルカ共に共通）。EÜ もマタイ・マルコ・ルカは、一貫した形で翻訳されている。[61]

「イエスの死」という重要な箇所であり、更に、そこで使用されている表現が稀であるがゆえに翻訳の多様性が与えられてしまった。しかし、そのような中でも一貫した形で翻訳

された聖書がある事も事実である。それでは、何故そのような翻訳がなされるのだろうか。十字架上で血を流し、大声で天に叫びながらイエスは死んだ。しかし、その最後の瞬間はわずかな息と共に消えいくようであった。福音史家は、イエスの死をただ普通の人や動物の死とは異なる、人の姿をした神の子の地上で見られる最後の瞬間として、十字架上での死を記述した。それは、θνήσκω（死にかけている、死のうとしている、死ぬ）などを使用せず、劇的な最後を演出するかのようである。しかし、verscheiden や sterben を使用して、この箇所を画一的に翻訳した諸々の聖書は、原典で使用されている言葉をどのように釈義したのだろうか（結果は同じであるが、「魂を引き渡す」などは今日でも残っている）。

イエス絶命の瞬間やパウロによる νέκρωσις の翻訳次第では、多くの信徒に余計な混乱を招き、また、不従順な者たちによる、信仰とはまったくかけ離れた行いの更なる増加を招くと考えられる。荒行を科して自身の身にイエスを体現させようとする試みは、古代から存在しており、中世には修道院の存在も相まって増加していった。この事を、ヴォルフガング・ブラウンフェルスは、こう述べている。

> キリスト教のもっとも初期の時代からすでに隠修士、すなわち自己を聖別化するためにすべての人間共同体を遁れた修道者がいた。〔中略〕一切を放棄し、神についての無限の瞑想にひたり、極端な禁欲修道のために自己の生存そのものをも危うくするような生活条件を受け入れ、荒野に遁れ、山峡に身を隠し、〔中略〕昼は太陽を夜は寒気をあびて数十年間も立ち続け〔中略〕個別的には十九世紀まで存在し、またインドでは今日でも存在しているのである。[62]

このように古代より、神に対する過剰な反応は上記のような異様な形で現れる事が多いとブラウンフェルスは説明している。そして、中世の信仰を色濃く残している時代を生きたルターは、自身の翻訳によって、再び古代から中世までに発展した過激な修行などが復活するかもしれないと恐れたのではなかろうか。ルターが『善い行いについて』を書き、その二年後にドイツ語訳聖書を翻訳した時から数えて十年少し前まで、ルターは比較的厳格な規律で有名なアウグスチヌス隠修修道会戒律厳守派修道院（Ordo Eremitarum Sancti Augustini）にいた。修道院での生活や自身の通っていた学校での事を、ルターは「ひどく多く鞭打たれ、おののき、不安がり、苦しんだのになに一つ学ばなかった、地獄や陰府」と述べている。[63] 過剰なまでの神への憧れ、恐れ、また、救いへの渇望に満ちた集団とその空間は、結果として聖書におけるイエスの言葉とは相反する行いに陥る危険性をはらむ。

(3)「十字架」の釈義

これまでの事を総合して考えると、ルターは多くの人が自分の力で聖書を読む事が出来、上から言われる事を無批判に受け入れるのではなく、自分で考え、何を神がお望みになっているのかを自問して、日々の生活を正しく送る事の重要性を説いた。また、教会の中に派手な行いや高額な寄進、死者が出るほどの断食を強いる悪しき指導者がいた場合で

も、信徒が聖書を読めて、日々の生活の中で考えていけば、イエスの教えの中に、そのような言葉が無いのに気づき、その指導者とのかかわり方を熟慮する時がくる、とも考えていただろう。しかし、信徒が自由に聖書を読めても、また、その解釈が自由であったとしても、誤読や拡大解釈の危険性がつきまとい、結局のところ適切な指導者の存在が必要となってくる。

人間は弱く、どうにかして神の心を動かしたい、もしくは自身が神に一歩でも近づきたいと、あれこれと「善い行い」をする。「私たちは善い行いの識別を、神の戒めから学ぶべきであり、その行いそのものの見かけ、大きさ、また数量から学ぶべきではない。また人間の判断、人間の法規、慣習から学ぶべきではない」（WA 6, 204）とルターが示しているとおり（本論文第二章参照）、「神の戒め」、まさに地上でのイエスの行動・言葉が「神の戒め」そのものであり、聖書を読む事が出来れば、そのイエスの生涯を知り、そこから「善い行いの識別」を学べる。[64] だが、適切な指導者がいない状態での過剰な読み込みは過ちを犯し、一人でも多くの人に聖書を読んでもらいたいと翻訳したはずが、結果として、教会における信徒の不在、派手な行いや高額な寄進など、これまで以上に神に対して不従順な行いが現れる危険性があったのではなかろうか。

ルターはローマ・カトリックに次ぐ新しいキリスト教会の設立を意図したわけではなく[65]、聖書に基づく信仰を幅広く伝えたかっただけであり[66]、それに賛同した多くの民衆や世俗の権力者の後押しによってプロテスタント運動が偶然の産物として広がり、新しい教派が確立したのである。しかし、その結果として、聖書から離れ、教会を飛び出し、奇怪な行動で神の意思を動かそうとする信仰形態（古代や中世に存在した隠遁者のように）が生まれる事だけは許せなかった。

τὴν νέκρωσιν τοῦ Ἰησοῦ という第二コリント書四章十節の訳出の際、das Sterben des hern Jhesu とあるように、ギリシア語の τὴν／τοῦ といった定冠詞を、しっかりとそれに対応するドイツ語 das／des に翻訳している。ラテン語には定冠詞はなく、指示代名詞が名詞と対になって物事を強調し、また、対象との距離や空間を強調するために使用される事があるが、ウルガタ聖書の mortificationem Iesu には、その指示代名詞類もない。ウルガタ聖書を暗記するほどに読み込んでいたルターが、実際にどの程度ギリシア語聖書を拠り所として翻訳していたのかについては様々な説が存在する[67]、しかし、少なくとも第二コリント書のこの箇所を翻訳する際にはギリシア語聖書を参照したに違いない。それは、ウルガタ聖書だけではなく、ギリシア語原典があったからこそ「制欲、禁欲、死亡」に「殺害」という翻訳の可能性が現れたため、ルターは悩み苦しみ、読み手の混乱する姿を想像して Sterben と翻訳した。なぜなら、十字架上の死が「殺害」だとしたら、「十字架上の死＝贖罪」だと信じている信徒たちにとって、自らの持つ罪は、イエスを見殺しにして贖われたという事になる。十戒や律法に新たな意味[68] を与えたイエスの生涯から十字架上での死までが贖罪につながっているのであって、十字架の瞬間だけではない。北博は「十字架上のイエス」を旧約聖書期からのメシア像と比較して、このように述べている。「メシア像は、新約聖書によって更に先鋭化した形で引き継がれ、『人類の罪を背負って十字架に赴く受

難のメシア』の表象となる。抑圧された民衆の憤りと深い悲しみは、一切の暴力性を持たない、抑圧され苦しめられるだけの人物に究極のメシアの姿を見出すのである」。[69] この分析の中に、受動的であったイエスの姿が描かれている。[70] そして、多くの信徒は、それがどんなに理不尽なものであっても、一切を受け入れ、全人類の罪を背負い十字架へと登る者にメシアの姿を見出した。第二コリント書における νέκρωσις はイエスの死に向かうまでのすべてを含んでいたのかもしれないが、仮にそうだとしても、死を決定づけた十字架刑は処刑であり、明確に殺人であった。「人類の罪を背負って十字架に登った」というよりは「人類の罪を背負って掛けられた」のである。「登った」という能動的なものではなく、「十字架上に掛けられた・登らされた」という最後の瞬間まで受動的であったイエスの姿があまりにも悲惨であったため、パウロは、コリント教会、並びに他の教会も含めて、キリスト教徒にとって危機的状況である今だからこそ、イエスを信じる事は、迫害の危険などに晒される苛酷なものであるが、イエス・キリストの十字架はもっと悲惨なものであり、今後信徒に降りかかるかもしれない苦しみと並ぶものではないという事を、常に信徒一人ひとりに意識させるために、その使用もまれな νέκρωσις をこの箇所に持ってきた。究極的には、パウロは神から使徒職を与えられた自身が、殺害されたイエスを身に背負い、迫害される中で宣教を行う姿を信徒に晒す事で、あの十字架上のイエスを示そうとしたのではなかろうか。[71] ただし、この考えはパウロをもって可能としたものであり、一般の信徒個人がこの考えのもとに信仰生活をおくる事を推奨するのは間違いである。

新約聖書学者ゲルト・タイセンは、パウロが十字架を新たに解釈し、罪の贖い以上のもの、いわゆる神と全世界との Versöhnung（和解）[72] と考えていると釈義した。タイセンが釈義するように、アダム以来続いてきた人間の罪を担った「キリストの死＝贖罪」への行程が、十字架という出来事を一つの転換点として、「贖罪＋神との和解」だとパウロが解釈していたとしたら、「イエスの死」を決定的にした十字架刑に大きな意味を持たせるのも当然の事だと考えられる。そして、死に至るまでの道のりであれ、その死の瞬間であれ、「イエスの死」に νέκρωσις を使用する事には、明らかにその他諸々の死と区別する理由があったはずだ。とりわけ、パウロが信徒に神との和解を説く（第二コリント書5：20）に続いて、キリストにおいて義となる事を説いている（第二コリント書5：21）聖句は、イエスを証する事で人間が義とされ、義とはイエスの死によって成り立っている事を意味している。

ギリシア語・ラテン語聖書に比べると、ルターの翻訳、並びに多くの聖書は、十字架刑も含めて、あらゆる死に赴く姿を連想する事が可能な Sterben の使用により、比較的読みやすいものとなっている。たしかに、この箇所に「殺害」や「苦行」の要素は必要ないと考えて、Sterben が多くのドイツ語訳聖書に採用されている。それは、一般的に信仰されているように「イエス様は私たちの罪のために十字架に登られた」という能動的な表現に現れている。十字架はあくまで受難であったため、イエスの死がどれほど悲惨であったのか、そして、その姿を日々想いながら生活する事が信徒の重大な使命だとするパウロが本来コリントの信徒に伝えたかった言葉の持つ力強さは Sterben ではなく、Ermordung や Leiden 等で表現する方が良かったのではないだろうか。詳しく述べると、救いや義といったものは、

イエスの死を大きな要素としており、その死を決定的にした十字架を「和解」としながらも、十字架を含めたイエスの死全体を「贖罪」と捉え、イエスの νέκρωσις を想う事で新たな命が信徒の内に現れる。パウロは、イエスの死という究極的な瞬間を「和解」と「殺害」で表現する事を可能とし、信徒に「義」という神と人間との関係[73]がどれほど重大な出来事の上で成り立っているのかを伝えた。しかし、義とつながっているイエスの無残な死の光景は、死を目の前（特に変死や頓死といった恐ろしい死）にした人間の行動を危惧していたルターが翻訳をする際に、その形を変えて翻訳された。パウロが選んだ νέκρωσις の持つ意味が強すぎて、信徒に躊きや恐怖を与えるような言葉を使用して、十字架の死、まさにその瞬間のみに信仰を集める事だけは避けたかったというルターの想いが Sterben の中に現れている。しかし、このようなルターの心配は、後の聖書注釈などを見ても徒労であったのではないかと思われる部分もある。[74]

おわりに

本論文は、翻訳を行う際に、本来いくつか考えられる死を表現する選択肢の中から、なぜ νέκρωσις を Sterben と翻訳したのかという疑問点を、ルター聖書を中心に述べてきた。しかし、このような傾向はルター聖書だけに当てはまるのではなく、その他多くの聖書にも見られる事である。「殺害」や「苦行」にあたる言葉が存在しないのならまだしも、ドイツ語、英語、我々の日本語でも工夫をすれば、パウロが νέκρωσις に込めた想いを表現するのに適した言葉を見つける事も可能だったはずだ。だが、そうしなかった事を、本論文では、死を目前にした人がそれを恐れるあまりに神に対して不従順な行動をとる事を危惧していたルターが、νέκρωσις の翻訳いかんでは自身の目指していた宗教改革とは逆行する信仰形態が現れるのではと恐れ、Sterben と翻訳したと仮説を立てた。実際、第二コリント書は、和解と義が隣りあって書かれ（5：20-21）、四章も直接的なイエスの死ではなく「イエスを証する事」の重大さを表すための νέκρωσις ではあるが、「イエス様は私たちのために進んで十字架に掛かって、私たち人間を義とされた」という言葉を信じてきた信徒にとって、「イエス様は私たちのために進んで十字架で殺害されて、私たち人間を義とされた」といった説教を簡単に受け入れられるだろうか。

ルターの翻訳における矛盾を検証する中で、この矛盾は必然的なものであり、むしろこの矛盾こそルターの宗教改革といえる。それは、ルターの掲げた聖書第一主義は、儀式を中心とした信仰生活から、まず聖書を読む事を信仰の中心にするので[75]、そのために必要な聖書を、長年カトリック教会が使用してきたものと同じものにする必要があるのだろうか（衝突と分裂を繰り返してきたあの正典と同じように）。「キリストが示される」ものとしての聖書が必要なのであって、ウルガタ聖書からの直訳が必要なのではない。ルターによる νέκρωσις の翻訳には、イエスの恐ろしい死の姿だけに焦点が当てられ、パウロの強い想いを誤解した未熟な信徒による不従順な行い、また、稚拙ともいえる受難の真似事（今現在でもエルサレムで見られる十字架を担いでゴルゴタの丘へ登る行為なども含む）に対

する懸念が示されているように思われる。「神の義」とは「イエスの死」を前提としており、νέκρωσις に様々な翻訳の可能性が秘められているにもかかわらず、ただ Sterben と翻訳する必要性を抱えた矛盾がそこには認められる。これまで検証してきたようなルターの時代（ルター自身も回顧するように、閉ざされた空間での苦行が修道院では当たり前の時代[76]）、中世の名残が濃く、贖宥状に信徒が群がっていた時には、Sterben 以上に適した表現はなかったのである。しかし、現在でもルター聖書は、翻訳した本人が目指した幅広い普及をはるかに超え、また、ギリシア語やラテン語は今でも学ばれており、ルターの残した原典との相異は、新たな研究対象として光があてられ、釈義され、パウロが本来伝えたかった言葉となって説教が行われる事だろう。

キリスト教が発生の時期から抱えている問題とユダヤ人、むしろそれ以上に異邦人への伝道 ── 世界宗教への発展 ── を目指したパウロの思考に存在する多様性と自身の出自からくる矛盾、それぞれが今でもキリスト教社会の中で生きている。そして、νέκρωσις というわずか一語の訳出から、約二千年前に誕生した宗教の根本にある、脈々と受け継がれてきた「神と人との関係」「義・和解とイエスの（十字架での）死」をめぐる問題の根深さが認められよう。パウロは、これらすべての要素を第二コリント書（特に四章と五章）に凝縮させて、新約聖書上まれな νέκρωσις を使用する事で、独特な緊張感を与えた。ルターの宗教改革とは、ルターがパウロ書簡から「神の義」を発見したその瞬間から、伝統的なローマ・カトリック教会への抗議だけではなく、キリスト教の始祖パウロが目指した信仰の実現、また、その実現を阻むであろう人間の本性（死を必要以上に恐れるなど）、それらの問題を解決する事と、同時に、絶大なる神の力、イエス・キリストによる贖罪・救済を自身の聖書翻訳、説教を通して幅広く伝える運動であった。νέκρωσις という一つの小さな単語ではあるが、パウロが最初に記し、ルターや他の聖書翻訳者がそれを解釈して、そして、現代に生きる者が「なぜ？」と深く考察する事で、今後も必ず新たな翻訳・釈義が現れる事だろう。νέκρωσις とは、キリスト教神学理解といった大きな課題に取り組むための切っ掛けの一つではないだろうか。

注

1）Vgl. Karl Barth: Der Römerbrief 1922. Zürich: Theologischer Verlag Zürich 2005, S. 5 ff.

2）Vgl. Martin Luther: Kritische Gesamtausgabe. Bd. 2. Weimar: Böhlau Verlag 1884, S. 689 f. 以下、ヴァイマル版からの引用の際には、WA の後に、巻番号と頁数を記す。

3）Das Neue Testament Griechisch und Deutsch. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft 2000. ギリシア語と聖句の引用は、以上を底本とする。

4）玉川直重が「殺されつつあること、死につつあること」と解説しているように、νέκρωσις 自体に進行形の要素が含まれている。玉川直重『新約聖書ギリシア語辞典』、キリスト教新聞社、2000年、646頁。

5）Martin Luther: Kritische Gesamtausgabe DB. Bd.7. Weimar 1968, S. 148. これ以降、特

に区別する場合を除き、sterben は頭文字を大文字の Sterben に統一する。

6）Menge Bibel（以下 MB）、Luther Bibel 1984（以下 LB ※ WA とは区別する）、Gute Nachricht Bibel（以下 GNB）、Zürcher Bibel（以下 ZB）、Elberfelder Bibel（以下 EB）、Schlachter Bibel（以下 SB）など、実際にドイツ語聖書のほとんどが Sterben と訳している。Neues Leben（以下 NL）では Tod、Einheitsübersetzung（以下 EÜ）では das Todesleiden と翻訳されている。

7）新約聖書学者青野太潮の釈義では「パウロはここで、具体的にイエスのあの十字架刑による殺害のことを考えているのであり、その十字架によって信徒の歩みは決定的に規定されてしまっている」として、第二コリント書四章十節における νέκρωσις の意味に注意が必要であると述べる。 青野太潮『「十字架の神学」の展開』、新教出版社、2006年、173頁。また、織田昭は、「イエスの殺害をこの体で（行く先々へ）運び回っている＝イエスを殺した殺しと共通する憎しみと迫害を（行く先々で）この身に受け続けている」と釈義している。織田昭『新約聖書ギリシア語小事典』、教文館、2006年、387頁。

8）マルコ14：60-64；15：1-5、マタイ26：57-68；27：11-14、ルカ22：66-23：5参照。

9）H・バルツ／G・シュナイダー（堀田雄康・川島貞夫訳編）『ギリシア語新約聖書釈義事典Ⅱ』、教文館、1994年、530頁参照。

10）ただし、テサロニケの第二の手紙、第一テモテ、テトスへの手紙、第一～第三ヨハネの手紙、フィレモンへの手紙、第二ペトロ、ユダの手紙には使用されていない。

11）バルツ／シュナイダー、前掲書、527-529頁参照。

12）新約聖書全体では、コリント人への第一の手紙、ローマ書、使徒行伝に多く見られる。ローマ書において、νεκρός の使用16回のうち12回が（ἐκ）（τῶν）νεκρῶν となっている。福音書において、マタイ、ルカの中に νεκρός の使用が多く見られるが、（ἐκ）（τῶν）νεκρῶν の形では、マルコ、ヨハネにおいて使用頻度が高い。ただし、ヨハネの黙示録にいたっては、νεκρός の使用は13回見られるが、一章五節に一度だけ τῶν νεκρῶν の形が使用されている。

13）現在の聖書学でパウロ自身によって書かれたと確認されている七つの書簡（テサロニケ人への第一の手紙、コリント人への第一・第二の手紙、ガラテヤ人への手紙、フィリピ人への手紙、フィレモン人への手紙、ローマ書）。青野太潮「テサロニケ～ローマ書解説」（新約聖書翻訳委員会訳編『新約聖書』、岩波書店、2005年）920-928頁参照。Vgl. Diarmaid MacCulloch: A History of Christianity. London: Penguin Books 2010, S. 127-137.

14）山田耕太「パウロ以後の展開」、木幡藤子・青野太潮編『現代聖書講座第２巻 ── 聖書学の方法と諸問題 ──』、日本基督教団出版局、1999年、353-354頁。

15）青野太潮「イエスとパウロ」、木幡藤子・青野太潮編、前掲書、258-259頁参照。

16）Vgl. H. G. Liddell: An Intermediate Greek-English Lexicon 7th ed. New York: Oxford University Press o. J., S. 358.

17）Vgl. ebd., S. 358.

18）Vgl. ebd., S. 527.

19）創世記2：17、3：19参照。

20）青野太潮訳「パウロ書簡コリント人への第一の手紙」、新約聖書翻訳委員会訳編、前掲書、543頁参照。

21）ここで問題となるのは、ユダヤ教の影響を受けながらも、イエス・キリストという新しい信仰対象を伝道する役割を担ったパウロが、魂、霊そして肉体をどのように捉えていたのかという事だ。ユダヤ教では、神の息吹により命を注がれ、単なる土の塊から「生きる者」（創世記2：7）となった人間から、魂のような物が離れ、霊的な存在としてあり続ける事はないとしている。これは、魂と肉体は一体と考えており、どちらか一方が朽ち果てたにもかかわらず、もう一方は生き続けるという事はない。しかし、新約聖書では「二元論的語法を反映して、魂と身体との区別（マタイ10：28、Ｉテサ5：23参照）や魂を肉欲の対立（Ｉペト2：11)、霊と肉との対立（ローマ8：2-16、ガラテヤ5：16-26、Ｉコリ3：1-2、ヨハ3：6；6：63）なども語られる。しかしその場合でも、《霊的人間》（Ｉコリ2：15「霊の人」）に対する《肉的人間》（Ｉコリ3：1「肉の人」）が《魂的人間》（Ｉコリ2：14「自然の人」）と表現され、また死者の復活においても、死すべき《魂的身体》(「自然の命の体」）にかわる永遠の《霊的身体》(「霊の体」）が復活する（Ｉコリ15：44）とされるように、霊魂と身体との対立ではなく、人間全体の自然状態としての命・魂とこれに新たな命を与える神の霊との関係が問題になっていると考えられる」(大貫隆・名取四郎編『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002年、1212-1213頁)。人間が自然状態で保有している魂・命は有限で、神に与えられる霊は無限である、と釈義されているが、ここで最も重要なことは「新たな命を与える神の霊との関係」である。最初に命を与えてくれた神と人間との関係は、契約を共にする共同体を通していた、しかし、イエス・キリストと人間との関係は、単なる共同体を通しての契約だけではなく、イエスの生涯を聞き、読みした事を信じて受け入れるのかという主イエス・キリストと人間個人との関係が非常に重要である。キリスト者を迫害するパウロに現れたイエス、そしてパウロの回心(使徒行伝9：1以下)。明らかにパウロはそれまでとは異なる「新たな命」を与えられ、使徒としてイエスを伝道し始めた。パウロは、迫害者であった自身に直接現れ、回心する機会を与えてくれた神との関係を大いに喜び、新しい恵みだとして各地を伝道した。Vgl. Barth, a. a. O., S. 7 f.

22）『死への準備についての説教』を訳出する際には、福山四郎・江口再起訳「死への準備についての説教」（徳善義和他訳『ルター著作選集』教文館、2012年）を参照した。

23）Vgl. MacCulloch, a. a. O., S. 605 f.

24）Vgl. ebd., S. 610 ff. ルターは最初のドイツ語訳新約聖書を完成させた1522年まで

に、度々ローマ教会からの異端審問を受け、ついに1520-21年にローマ教会から破門される。この前後には激しい論調で教会の腐敗を暴露した書簡と死への恐怖に怯える人に宛てた書簡が並行して書かれている。当時ルターは、破門された修道士として自身の命の危険に晒されながらも、説教でもって信徒の死への恐怖を軽減する作業に追われていた。本論文では、死をめぐる当時の信徒の状況とそれに対するルターの対応、そこに、使用例が僅かで解釈が困難である νέκρωσις を研究の中心とする事で、これまでにないルター聖書翻訳論を試みた。

25）Vgl. Luther, WA 2., S. 689.

26）Vgl. Martin Marty: Martin Luther. New York: Penguin Books 2008, S. 29 ff.

27）Vgl. ebd., S. 34 ff.

28）Vgl. Luther, WA 2., S. 689.

29）Vgl. MacCulloch, a. a. O., S. 97 ff.

30）第二コリント書は、まだイエスの十字架刑から三十年も経ってないであろう時期に書かれた手紙であり、パウロにとっても、初期キリスト教信仰者たちにとっても、イエスの死は残酷な出来事として記憶されていたと思われる。青野太潮「コリント人への第二の手紙解説」、新約聖書翻訳委員会訳編、前掲書、922頁参照。Vgl. J. M. Roberts: The New Penguin History of The World. London: Penguin Books 2007, S. 265 ff.

31）ジャン・カルヴァン（田辺保訳）『新約聖書注解Ⅳコリント後書』、新教出版社、1995年、80頁。この釈義の中の「死」を、田辺保は「これは単に『死』というよりも、むしろ、『死にいたるまでの恥辱・苦悩』というほどの意味がこめられている。ほかに、自分の肉をうちたたいてする『苦行・禁欲の修行』の意味もある」と説明している。田辺は、イエスは殺害されたが、その死を信徒が背負う事は出来ないので、その死のような苦行・禁欲を背負う事をパウロがこの箇所で述べている、と釈義している。

32）注７参照。

33）Vgl. MacCulloch, a. a. O., S. 91 ff.

34）注31参照。

35）Vgl. Luther, WA 2., S. 689.

36）Vgl. Barth, a. a. O., S. 5 f. カール・バルトの釈義では、死者たちからの復活がイエスを神の子として強く定めたとしている。ただ普通に死んだというよりは、忌み嫌われた者として死者たちの中から復活した事が重要である。（マルコ15：27、マタイ27：38、ルカ23：33、ヨハネ19：18参照）

37）Vgl. Jens Schröter: Sühne, Stellvertretung und Opfer zur Verwendung analytischer Kategorien zur Deutung des Todes Jesu. In: Deutung des Todes Jesu im Neuen Testament. Hrsg. von Jörg Frey und Jens Schröter. Tübingen: Mohr Siebeck 2005, S. 53.

38）Vgl. Udo Schnelle: Theologie des Neuen Testaments. Göttingen: Vandenhoeck und

Ruprecht 2007, S. 141.

39）『善い行いについて』を訳出する際には、福山四郎・江藤直純訳「善い行いについて」（徳善義和他訳『ルター著作選集』教文館、2012年）を参照した。

40）徳善義和『マルチン・ルター――生涯と信仰』、教文館、2007年、94-98頁参照。

41）Vgl. Frédéric Hartweg / Klaus Peter Wegera: Frühneuhochdeutsch Eine Einführung in die deutsche Sprache des Spätmittelalters und der frühen Neuzeit. Hrsg. von Gerd Fritz und Franz Hundsnurscher. 2. Aufl. Tübingen: Max Niemeyer 2005, S. 79. ルターの居住地は中部ドイツと低地ドイツの境目の東中部ドイツ語地域であり、同時に、バイエルン、フランケン、ヘッセン方言を母語とする人たちとの交流が、ルターの聖書翻訳に大きな影響を与えた。

42）エデュアルト・シュヴァイツァーは、施し、祈り、断食をする時、派手な行いで神や周りから褒めてもらおうとする人々に対する戒めを、マタイ福音書六章は「完全に類似する言語表現」で譬えていると釈義し、この三つの行いに注意する必要があるとしている。

Vgl. Eduard Schweizer: Die Bergpredigt. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht 1984, S. 54.

43）Vgl. Marty, a. a. O., S. 29 ff.

44）徳善義和は当時のキリスト教社会を、「中世末の教会は宗教機構としてはほとんど完成の域に達していたと思われる。コンピューター的に言えば、社会の中で働く『オペレートするシステム』である。しかし、このシステムには、チェックする機能はない」と分析しており、ローマ教皇を最上位として成り立っている巨大機構を外から監視・指導するための運動としてルターの宗教改革があったと述べている。すなわち、本来、宗教改革はローマ・カトリック教会を「チェックするシステム」であり、最初は別の教会をつくる予定など無かった。だが、宗教改革が進むにつれ、信仰の場の必要性から教会を建て、聖書第一主義を伝道するための教派を形成するに至った。そして、いつの間にか「チェックするシステムがオペレートするシステム」へと変貌した。徳善義和「総論ルターと宗教改革」、日本ルーテル神学大学ルター研究所『ルターと宗教改革事典』、教文館、1995年、9頁。

45）無断での複製や意図的な書き換えを防止するために、ルターにより出版が認められた聖書には著作権を示す検印が押されていた。Vgl. Hartweg / Wegera, a. a. O., S. 86.

46）Vgl. ebd., S. 91.

47）一般的に、十字架上のイエスと復活のイエス、そのどちらかを信仰しなくてはならないという事はない。しかし、そのどちらかに特に強い信仰心を抱く信徒は多い。使徒パウロは、キリスト教徒迫害のために向かったダマスコの途上で、天からの光の中でイエスの声を聞き、イエスが主であると知った（使徒行伝9：1-5）、一方で、ローマの百人隊長（ローマ式軍隊の隊長。属州ユダヤに配備された「補助軍」の場合は、百人隊長は現地の非ユダヤ人。新約聖書翻訳委員会訳編、前掲書、用語解説36頁参照）は、十字架上で無残な姿で死んでいったイエスを見て、

神の子だと知った（マルコ15：39、ルカ23：47、マタイ27：57参照）。パウロも百人隊長も共に迫害する立場でありながら、パウロは光に満ちた栄光の中からのイエスの声を聞いて、また百人隊長は十字架上で血まみれのイエスを見て、イエスが主であり神の子であると認識する。栄光の中にいるイエスの声を聞きながらも、パウロは逆説的に十字架上のイエスの νέκρωσις を日々想い続ける事で、イエスの命が信徒一人ひとりの中に現れるとした。Vgl. Schnelle, a. a. O., S. 203 f.

48）ヤン・ランブレヒトによれば、νέκρωσις は死に向かっていく動き（dying）であり、生きている者が死んだ状態（death）へと渡されていく過程と定義した。Vgl. Jan Lambrecht: The nekrosis of Jesus: Ministry and Suffering in 2 Corinthians 4,7-15. In: Studies on 2 Corinthians. Hrsg. von Reimund Bieringer und Jan Lambrecht. Leuven: Leuven University Press 1994, S. 309-333.

49）ルターの『小教理問答集』（Der Kleine Katechismus）などは、学校や教区共同体で多くの信徒が教会生活を送るために必要な教科書として広まり、版を重ねながらキリスト教の根本的思想教科書として初等教育機関でも使用されるようになった。そして、その後の数世紀の間、ルターによる語彙使用や筆法は、あらゆる世代の手本となった。しかし、聖書翻訳に関して、ルター以前にも翻訳の試みは存在したが、それらはローマ・カトリックの制約を受けていた（翻訳差し止めや発禁処分など）。また、翻訳形式において、ウルガタ聖書から自由になれるものではなかった。そして、翻訳が完成しても、それは聖職者による使用を前提としたものであり、キリスト教初心者から使用出来るものではなかった。ルターの考える宗教改革とは、万人が聖書を読む事を第一としているため、それまでのような翻訳では不十分であった。読者を離れさせない聖書翻訳を志し、改訂は晩年まで行われ、しばしば低地ドイツ語の翻訳形式を参考にしている箇所もある。Vgl. Hartweg / Wegera, a. a. O., S. 80 f.

50）Vgl. Eduard Lohse: Der Brief an die Römer. In: Kritisch-exegetischer Kommentar über das Neue Testament. Hrsg. von Dietrich-Alex Koch. Bd. 4. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht 2003, S. 160.

51）ウルガタ聖書には、emortuam vulvam Sarrae（サラの死滅した子宮）とある。emortuam（<emorior 徐々に死ぬ、死滅する、減退する）には過去完了的意味があり、「死んでいる状態が長く続いていた」となり、二度と子を産めない状態を強調していると考えられる。田中秀央編『羅和辞典』、研究社、2005年、215頁。

52）Vgl. Barth, a. a. O., S. 130 ff.

53）ただし、例外が存在しながらも、第二コリント書における νέκρωσις には Sterben というほぼ定まった翻訳があるのとは異なり、ローマ書ではそのように決まった表現が見られない。Mutterschoß（Schoß 母胎・内部）がドイツ語訳聖書で多く使用されている表現（MB、GNB、EÜ、ZB）。一方で、[...] sie konnte keine Kinder mehr bekommen（NGÜ）のように、間接的に母胎が死んだと述べている聖書もあ

る（NLB にも同様の表現）。ランブレヒトの νέκρωσις 解釈（注48参照）を参考にすると、[...] das Absterben des Mutterleibes der Sara [...]（EB）が最も忠実に意味を捕えているように見える。しかし、ウルガタ聖書（注51参照）やサラの年齢を考慮すると、疑問点も残る。英語訳聖書にも、ドイツ語訳聖書と同様の傾向が見られる。直接的に「サラの母胎が死んだ」事実を表現している翻訳（キング・ジェームズ版〔以下 KJV〕、アメリカン・スタンダード版〔以下 ASV〕他）と間接的に述べている翻訳（グッド・ニュース・トランスレイション〔以下 GNT〕他）などが存在する。独英語訳聖書に見られるこれらの傾向を、多様性の現れと考える事も可能である一方で、νέκρωσις は第二コリント書もローマ書も共に、信徒一人ひとりに強い信仰を求める箇所で使用されており、ローマ書では、強い信仰心とは如何なるものかを説いているが（アブラハムの信仰心）、第二コリント書では、その強い信仰には多くの危険を伴い、しかし、その危険は新しい生命を得るには必要な事だと説いている。同じ νέκρωσις であるが、翻訳者に求められる責任の重さは明らかに異なる。

54）第二コリント書において、この傾向はドイツ語訳聖書同様に英語訳聖書にも多く見られる。νέκρωσις は多くの聖書で death を採用している。KJV や ASV では dying。しかし、περιφέρω（運び回る、持ち回る）では bear/carry で表現されているのがほとんどだが、バイブル・イン・ベーシック・イングリッシュ（以下 BinBE）では、[...] there is ever the mark of the death of Jesus, [...]、ニュー・リヴィング・トランスレイション（以下 NLT）では、Through suffering, these bodies of ours constantly share in the death of Jesus [...] など、原典とはかなり異なる翻訳も存在する。なぜなら、Through suffering（NLT）には、前述したカルヴァンの釈義（注31参照）に通じる所があり、イエスの死とは、イエスを信仰する者たちが直面する苦難を通して、その自身の体において常に共有する、と解釈出来るが、原典のどこにも Through suffering に相当する言葉は出てきていない。この言葉は、直前4：8-9に書かれている信徒の置かれた苦境を一言でまとめたものだと考えられる。

55）注 6 参照。

56）イエスが十字架に架けられたのは午前九時頃で、絶命した時間は午後三時頃であった。佐藤研訳「マルコ福音書」、新約聖書翻訳委員会訳編、前掲書、67-69頁参照。

57）注54参照。ドイツ語訳聖書では、Durch das Leiden erfahren wir am eigenen Leib ständig den Tod von Christus, [...]（NL）、という例が稀にある。ただここで、Durch das Leiden（その苦難・受難を通して）が、直前4：8-9を示しての「その苦難・受難」であるのか、信徒にとっては周知の「キリストの受難（das Leiden Christi）を通して」であるのかが問題となってくる。しかし、文脈から考えてみても、4：8-9が妥当ではあるが、ここではキリストの受難を表す単語（das Leiden と Christus）が前後に使用されている事を見逃してはいけない（他のドイツ語訳聖書

では Sterben/Tod が Jesus と結ばれている）。

58）青野、前掲書、165頁。

59）同上、164頁参照。

60）ただし、ここで例えとして挙げた百人隊長と、ルカ7：1-10、マタイ8：5-13に出てくる百人隊長とは一応区別しておく。

61）同じ表現のヨハネ19：30では、ギリシア語 παρέδωκεν τὸ πνεῦμα（παραδίδωμι 手放す、引き渡す）とラテン語 tradidit spiritum（trado 手渡す、引き渡す）のように、マタイと同様明確な目的格（τό πνεῦμα/spiritus）の存在が見える。しかし、ここでも頑なに verscheiden（LB、ZB）sterben（NGÜ、NL）を使用している聖書もある。これまで一貫して sterben を使用してきた GNB は、[...] sein Leben in die Hände des Vaters zurückgeben（彼の命を父の手に返す）のように原典に近い翻訳になっている。また、seinen Geist aufgeben（EÜ「彼の霊を手放す」、MB では den Geist）、そして、den Geist übergeben（EB、SB「その霊を手渡す（委ねる）」）とあるが、ギリシア語原典 παραδίδωμι には、ただ、ある物質を外に放つというよりは、「手から手へと渡していく」、「大事なものを引き渡していく」という意味が強いため、übergeben などがその翻訳に適しており、一貫して verscheiden、sterben で翻訳する方法は適切とは言えない。四福音書のこの箇所に関しては、英語訳聖書にもこのような傾向が見られる。ただし、ドイツ語訳聖書と異なり（特に LB、ZB、NGÜ、NL）、すべての箇所を verscheiden、sterben と共通する die で表現している聖書はほとんど存在しない。GNT におけるマルコ・ルカは、原典を自動詞的に解釈して Jesus died（これは LB、NGÜ などの verscheiden/sterben と共通する）としているが、マタイ・ヨハネはギリシア語・ラテン語に忠実な形で翻訳されている。他の聖書（KJV、BinBE、ASV、NLT など）は英語で可能な限りギリシア語・ラテン語の表現を再現している。

62）ヴォルフガング・ブラウンフェルス（渡辺鴻訳）『西ヨーロッパの修道院建築――戒律の共同体空間』、鹿島研究所出版会、1974年、23-24頁。

63）マルティン・ルター（徳善義和訳）「ドイツ全市の参事会員に宛てて、キリスト教的学校を設立し、維持すべき事」、徳善義和編・訳『キリスト教古典叢書ルター著作選集』、教文館、2012年、484頁。

64）渡辺信夫は、「聖書が大事なのは、『そこでキリストが示される』からである。聖書という書物や、そこに書かれている文字が尊いのではなく、与えられるキリストが大事なのである」と解釈しており、これこそプロテスタント運動の中心ともいえる聖書第一主義の要である。ルターが翻訳を行い、聖書を普及させるために尽力したのは、ただ姿勢として、また文字だけで聖書を読むというのではなく、聖書に描かれているキリストに出会うためである。日々の教会などで行われている儀式等は、聖書の中で行われている出来事を象徴的に捉え、初期キリスト教会成立後、長い年月をかけて制度化されたものである。キリストの神性と人性を表

現する際に使用する、「地上のイエス」という言葉ではなく「日常のイエス」に出会う事が聖書の大きな役割だと言える。渡辺信夫『プロテスタント教理史』、キリスト教新聞社、2006年、71頁。

65）注44参照。

66）注41参照。

67）金山正道「ドイツ共通語の成立 ── 中世からルターまで ──」、『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』、Vol. 6（7）、2007年、87頁参照。

68）ヨハネ7：14-24、第二コリント書3：7-18参照。ユダヤ教徒にとって必要な事はすべて律法の中に含まれており、律法とは、宗教的・市民的法律や哲学的な教えなどの区分はなく、生活する上で守るべき最重要なものであった。パウロは、律法主義的であったかつての自分を反省する事も含めて、書簡の中で律法批判を展開した。しかし実際に、パウロ時代の教会が、律法からどれほど自由であったのかは不明である。新約聖書翻訳委員会編、前掲書、用語解説44頁参照。

69）北博「黙示文学」、木幡藤子・青野太潮編、前掲書、204頁。

70）ルカ22：66以下、マタイ26：59以下、マルコ14：55以下、ヨハネ18：19以下参照。

71）バルツ／シュナイダー、前掲書、530頁参照。

72）Vgl. Gerd Theißen: Das Neue Testament. München: C. H. Beck 2010, S. 55 f.

73）ルターは第二コリント書5：21において、「私たちが、彼（イエス）において神の義となるため」の後に、「それ（神の義）は神の御前で有効である」というギリシア語原典には無い表現を加えている。パウロ書簡において神の義を体験したルターによる、徹底した信仰義認理解が示されている箇所の一つである。「神の義」とは人から現れるものではなく、ただ神の前において示されるものだ、とルターは原典にない文章をつけ足して強調した。

74）新改訳聖書の注解に、「パウロの絶えざる迫害と苦しみがイエスの苦難と関連させられる。イエスが死んでも復活したように、パウロも死ぬような苦しみの中で、なおイエスの命によって生かされている」（傍点筆者）と述べられている。パウロはイエスを証する事で迫害の中にいたが、逆説的に、迫害の只中でこそイエスの命が自身に現れ、生かされている事を実感している。この聖句の釈義には、傲慢で自己満足的な信仰の姿はなく、日々生かされている事への感謝が示されている。『新改訳聖書（注解・索引・チェーン式引照付）』、いのちのことば社、2005年、349頁。

75）注64参照。

76）注63参照。

Die Übersetzung des Neuen Testaments nach Martin Luther

—— Bezüglich der Übersetzung von „νέκρωσις“ aus dem Griechischen ins Deutsche ——

Jun HIROMATSU

Einführung

„Das Sterben des herrn Jesu“ stellt einen Wendepunkt Jesu auf der Erde und im Himmel dar. „Das Sterben Jesu“ steht für die Sühne, die Erlösung und Auferstehung, aus denen das Christentum besteht.

Obwohl „νέκρωσις“ (2. Korintherbrief 4:10) die Bedeutung „Sterben“, „Ermordung“, „Askese“ usw. besitzt, wird „Sterben“ bei der Übersetzung in fast allen deutschen Bibeln ausgewählt. Obgleich Paulus den Todesschmerz Jesu mit „νέκρωσις“ überliefern wollte, übersetzte Martin Luther „νέκρωσις“ aus dem Griechischen *nur* mit „Sterben“.

Diese Abhandlung beschäftigt sich damit, wie die Übersetzung von „νέκρωσις“ und „mortificatio“ (Vulgata) durch die in Luthers Werken beschriebenen Warnungen vor der falsch verstandenen Gottesfurcht beeinflusst ist. Hierduch sieht man aber auch, dass die Lutherbibel uns *die Freiheit* schenkt, dass alle Übersetzer, der Exegese gemäß, die Bibel übersetzen dürfen.

Kapitel 1

Im Neuen Testament wird „νέκρωσις“ an zwei Stellen benutzt (2. Kor. 4:10; Römerbrief 4:19). „νέκρωσις“ ist abgeleitet von „νεκρός“. Im Unterschied zu „νέκρωσις“ wird „νεκρός“ in allen Teilen des Neuen Testaments benutzt. Aber fast alle Formen lauten „ἐκ τῶν νεκρῶν (von den Toten)“. Im Neuen Testament bezeichnet „νεκρός“ meistens entweder den Zustand, an dem jemand *beinah starb*, oder die tote Substanz, oder totes Fleisch.

Seine Briefe schrieb Paulus allen Gemeinden in einer Krisenzeit der Urkirche (1. Kor. 1:10; 2. Kor. 11:13-15). Das Urchristentum stand in dieser Periode sehr stark unter dem Einfluss des Judentums. Im Brief benutzte Paulus „νέκρωσις“, weil „νέκρωσις“ als eins der wenigen Dinge alle Christen im starken Glauben an Jesus einen konnte. Im Unterschied zu „θάνατος“ erinnerte „νέκρωσις“ alle Christen an das Bild des tragischen Todes Jesu, was in dieser Zeit notwendig war.

Obwohl es eine sehr schwierige Sache ist, zwischen „θάνατος“ und „νέκρωσις“ zu unterscheiden, weicht aber „νέκρωσις“ („νεκρός“ als das tote Fleisch) von „θάνατος“ ab. Seit Adam und Eva erleiden die Menschen „θάνατος“ als Erbsünde und werden durch Christus von den Toten (νεκρῶν) auferweckt (1. Kor. 15:21). Hier zeigt sich der Unterschied zwischen „νεκρός“ und „θάνατος“: Man stirbt und wird zum Zustand „νεκρός“, und wird von diesem durch Christus erlöst. Deshalb haben „νεκρός“ und „θάνατος“ nicht die selbe Bedeutung. Die Übersetzer und Prediger müssen die

Wortbedeutungen „θάνατος“ und „νέκρωσις“ deutlich unterscheiden, weil Paulus „νέκρωσις“ an zwei Stellen in den Briefen bewusst verwendete, um eine Aussage zu formulieren, die *nur* „νέκρωσις“ ausdrücken kann.

Martin Luther predigte, dass Menschen die Hölle nicht zu fürchten brauchen, weil der Tod schon von Jesus überwunden wurde und er den Menschen von seinen Sünden erlösen wird. Aber fast alle Christen in der Lutherzeit kauften Ablassbriefe und spendeten der Kirche um dem Fegefeuer zu entgehen. Obwohl Paulus „νέκρωσις“ von „θάνατος“ unterschied, durfte aber Luther „νέκρωσις“ aus dem Griechischen nicht mit „Ermordung“ oder „Leiche“ ins Deutsche übersetzen, weil die Menschen den Tod zu sehr fürchten würden, wenn er den Christen das Bild des grausamen Todes anschaulich vor Augen führen würde. Luther wollte stattdessen, dass die Menschen sich an „das Sterben Jesu“ positiv erinnern, um den Tod zu überwinden und ein neues Leben zu erhalten, wie es in 2. Kor. 4:10-12 steht. Luther dachte darüber nach, wie er allen Christen, die eine unüberwindliche Furcht vor dem Tod hatten, „das Sterben Jesu“ predigen sollte.

Kapitel 2

Luther lehrte, dass die Erlösung nur von Gottes Gnade kommen kann. Nicht was der Mensch tut, um sich selber zu retten, kann für Gott Grund zur Gnade sein. Luther war besorgt darüber, dass die Gläubigen nach den Belehrungen der Kirche handelten und nicht nach der Offenbarung Gottes.

Ein weiteres Problem war, dass die Interpretation der Bibel durch die Kirche sehr kompliziert geworden war, die meisten Gläubigen jedoch nicht mal Lesen und Schreiben konnten. Da Luther seine Bibelübersetzung auf Deutsch in allen Regionen des deutschen Sprachgebiets verbreitete, konnte sich seine Übersetzung selbst da durchsetzen, wo man anfangs sich seinen Lehren widersetzt hatte. Die Lutherbibel wurde dadurch aber auch zum Standard für die deutsche Sprache.

Vermutlich hatte Luther gedacht, dass es gefährlich wäre, den Glauben auf das grausame Bild des Todes Jesu am Kreuz zu konzentrieren, weil alle Christen dann nur diesen Moment mit der Vergebung der Sünden, der Gerechtigkeit Gottes und der Erlösung verbinden würden. „νέκρωσις“, das Paulus von allen Christen verlangte, ist nicht identisch mit dem „Sterben Jesu“, das im ersten Jahrhundert in Palästina geschah.

Es ist ein großer Unterschied, ob man in Gedenken an „das Sterben Jesu“ und aus Dankbarkeit für Gottes Gerechtigkeit ein bescheidenes und demütiges Leben führt, oder ob man versucht, dass Leiden Jesu nachzuahmen, indem man sich selber geißelt und sich körperliche Schmerzen zufügt und hofft, dadurch ein besserer Christ zu sein, als die übrigen.

Kapitel 3

Dieses Kapitel vergleicht die Stelle „Jesus starb“ aus der Lutherbibel mit anderen deutschen und englischen Bibeln und den synoptischen Evangelien. Im Unterschied zu vielen deutschen Bibeln werden die vielen englischen Bibeln aus dem Griechischen und Lateinischen relativ wortgetreu

übersetzt.

Es fiel Luther und den anderen Übersetzern schwer, die Vergebung der Sünden genau zu begreifen: Wann wurde die Vergebung vollendet? Denn die Bedeutung der Vergebung ändert sich sehr, je nachdem, ob man das ganze Sterben Jesu für die Vergebung berücksichtigt, oder ob nur der Tod Jesu am Kreuz für die Vergebung wichtig ist.

Das Sterben Jesu steht für verschiedene Sünden der Menschen: Denn Jesus, das Kreuz auf seiner Schulter tragend, wurde von den Bewohnern Jerusalems beschimpft, geschlagen und angespuckt. Obwohl er die Erbsünde als die größte Sünde trug, trug er zusätzlich noch weitere Sünden der Menschen.

Wenn man *nur den gekreuzigten Jesus* als Sühne erachtet, würde die Versöhnung und die Gerechtigkeit aus dem Bild Jesu am Kreuz blutend, schreiend und *sterbend*, bestehen: Nur die „Ermordung (νέκρωσις) Jesu am Kreuz“ vollendet die Erlösung.

Die Lutherbibel und die anderen Bibeln wurden ohne strategische Absicht übersetzt, weil „νέκρωσις“, geschrieben von Paulus in der Krisenperiode zur Einigung aller Christen, und „Jesus starb“ in den synoptischen Evangelien mit dem Wendepunkt von Jesu auf der Erde und im Himmel und der Versöhnung, der Vergebung der Sünden und der Gerechtigkeit Gottes, die das Bündnis zwischen Gott und den Menschen darstellt, zusammen gedacht wurde. Deshalb bilden diese Bibeln eine gute Interpretationsgrundlage. Aber je nachdem, wie „νέκρωσις“ übersetzt und interpretiert wird, kann ein für die Menschen schädlicher Glaube (wie im Altertum und Mittelalter) entstehen.

Sich an sein eigenes Klosterleben erinnernd hat Luther die Christen davor gewarnt, die Nachfolge Jesus Christus in den strengen Ordensregeln oder der Abgeschiedenheit des mittelalterlichen Klosters zu sehen.

Epilog

Die Reformation und die Geburt des Christentums standen mit sich selbst in Widerspruch, vielmehr besteht der christliche Glaube aus diesem Widerspruch.

Obwohl die Reformation sich auf den Kanon (Vulgata) nicht zu beschränken brauchte, weil die Reformation ein heftiger Protest gegen den Kanon war, aber „das Sterben Jesu“ u. ä. in vielen Bibeln nach der bisherigen Tradition, die sich in der Predigt bewährt hatte, übersetzt wurden, ist dieses „Sterben Jesu“ die das Schicksal akzeptierende Passion, und hat doch noch einen positiven Aspekt, der im Glauben an das „Jesus starb für uns“ repräsentiert ist. Wenn man es überspitzt sagen will, hat die Vorstellung vom „Sterben Jesu“ in der Reformation der katholischen Überzeugung im Grunde geglichen.

Ein neuer, protestantischer Kanon entwickelte sich zu einem Standard der Kirche und verband sich mit einer neuen Erziehungsreform und einer gesellschaftlichen Macht. Die Möglichkeiten, die seit der Geburt des Christentums schon im Widerspruch angelegt waren, haben sich durch die Reformation manifestiert. Die neuen Übersetzungen und Interpretationen werden nun von der

wissenschaftlichen Forschung geleitet. Sie haben einen großen Einfluss auf die Methode der Bibelübersetzung seit der Reformation. Viele Elemente z. B. die Bedeutung des Originals, der politische oder historische Hintergrund, oder ein thanatologisches Problem, werden dadurch neu untersucht und interpretiert.

Obwohl „νέκρωσις“ ein kleines Wort ist, von Paulus zuerst geschrieben, und von Luther und anderen Übersetzern interpretiert, spielt es auch heute noch eine große Rolle und wird neue Übersetzungen und neue Interpretationen verursachen. Das Problem um „νέκρωσις“ bildet einen Einstieg zum tieferen Verständnis des Christentums.